心のゆたかな 子供たちに

しでがの通信
第 68 号
羽津小 P・T・A
編集発行
発行所 羽津小学校

恒例になりました両親学級が、今年も十一月十八日、日曜日、しかも雨にもかゝわらず、非常に多くの方々に御出席を頂き、各教室にて行なわれ、いつもの授業参観とは異った雰囲気で、子供達も、にこにこ、そわそわとほゝえましい光景もみられたひとゝきでした。その後場所を講堂に移し、六年生のみごとな器楽合奏を口ずさみながら聞いた後、四十年もの長期間にわたり教職につかれ、現在、四日市市立教育研究所嘱託として「市教育百年史」編集主任の要職につかれ、四日市市の教育百年の歩みを調査、編集に御活躍中の井田正典先生をおむかえし、〝家庭教育のわすれもの〟と題して川柳、狂歌ありユニークな肩の凝らない、しかも、有意義な講演を拝聴し、我々、子供をもつ親として反省させられる面も多く、望ましい両親の姿にすこしでもちかづくよう心の手綱を引きしめ、家庭教育に望まなければと、ひしひし感じられた講演でした。

家庭教育のわすれもの

講師　井田正典氏

家庭教育と言うと、通常、母親が担当していますが、そうした日常の躾とかいうのでなく、本日は、父親の方を対象として、もう少し大きな立場から、家庭教育を考えていきたいと思います。よく母親が講演会で聞いたことを、そのまま、自分の子供にあてはめますが、そうではなくて、兄弟でも性格や能力が違うので、子供一人一人についてどう育てたらよいかと言う事が基本的に大事ですから、こうした問題は、じっくりと自ら考える必要があります。

現在の社会風潮として、子供達は、身々ともに蝕ばまれている子が多くなっている。無気力、無関心、無感動の三無や、精神的離乳していない青少年が増えている。

又、身体の面でも、骨折、肩こり、朝会で倒れる子供が多く、いわば、うどの大木になっています。このような原因は、大きくわけて、社会教育、学校教育、家庭教育にあります。

今日の学歴社会では、母親は、入学と同時に、子供を点取虫の点眼鏡で見ます。学校教育でも、教育器具を使っての授業が多くなり、大学でも産業化しています。学校の成績の良い生徒が、必ずしも成功しないで、むしろ成績の遅れていた生徒が、会社の社長になっている例が幾つかあります。ですから、昔から親という字が〝木の上に立って見る〟といわれるように、私たちは、子供を記憶力が良ければ良いといった近視眼的な見方でなく、一歩距離をおいていくように指導していくべきです。いわばテレビっ子の受身で依存心の強い、均一的な子供から、文字を通して自ら考えていく人間へと文字の教育へ戻していく努力が必要です。

一方、家庭教育における父親の

目　次

心のゆたかな子供たちに……1
バザーによせて……4
趣味のつどい……5
表彰をうけて……6
グリーン・スクール……8
最優秀作に輝く！（社会福祉大会にて）……12
暮らしの歳時記……14

立場として、戦前の親父から育てられた体験をふり返って、社会的な厳しさ、客観的なものの見方、視野の広さを通して、新しい、いい意味での「ガンコ親父」にもどる必要があります。「家庭とは父厳しく、母やさしいそれでいいのだ、うちは違うが」の子供の川柳にあらわされているように現実には父と母の立場が逆になっている。

最後に父親として、自分の職業に対する責任、夫婦ゲンカしない、子供に社会の常識的ルールを守らせる等に注意し、人間としての生き方を子供に教えてほしい。

「朝刊の記事をば、父に話しかけ、無知、無関心、しらけた朝食」

「努力する姿も見せずわが父は要領いい奴、出世しやがる」

「金持は悪人、政治家は皆馬鹿話す父親　その下の下」

＝井田正典先生の講演より＝

×××××××
×××××××

講演を聞いて

富士町　早川　和宏

社会の変動が激しく多様化して進んでいる現代にて、いま私達は子供と、子供が置かれている状況に深い関心、あるいは懸念を抱かざるを得ない。

どんな時代でも、子供は親が体験したのとは別の社会状況の中で育ち、親の知らない問題にぶつかっている。子供をどう理解し、どう育てていくかは、現実の親の悩みである。

青少年の自殺や非行が新聞紙上に、現代の青少年は無気力、無関心、精神的離乳がいつまでも出来てないとの内容である。

題して、家庭教育の忘れもの、原因は社会、学校等教育面にあるが、家庭教育に的をしぼり伺った。先ず、人間関係、家庭では父母、社会では同僚上司、人間成長の過程、失敗の経験、座折もあるだろう、成育の歴史をふり返りながら人間形成をつくり出すのである。皆同じに生まれても、能力、素質、環境が夫々違い環境が人を作ると言うが豊かな中で、ほんとうの人間形成が出来るのか、よく子供の口から時代が違うと一口にて言うが、確かにそうだと思う。明治維新より積み上げの戦前教育と戦後の民主主義教育の考え方であると思う。

金さえ出せば何でもあるという豊かな時代、特に三十五年頃からのテレビの普及により、戦前戦後というが三十五年以降に分けてはどうか、文字文化と言うが読書よりもテレビと、最近では活字離れ、我々親をみても、手紙と言うとなかなか書けず電話の普及にて用を足している時代である。

自分の将来はとの問に対し、「趣味にあった、のんきな生活」と個人生活中心の人生設計を日本の小中学生は描いている。

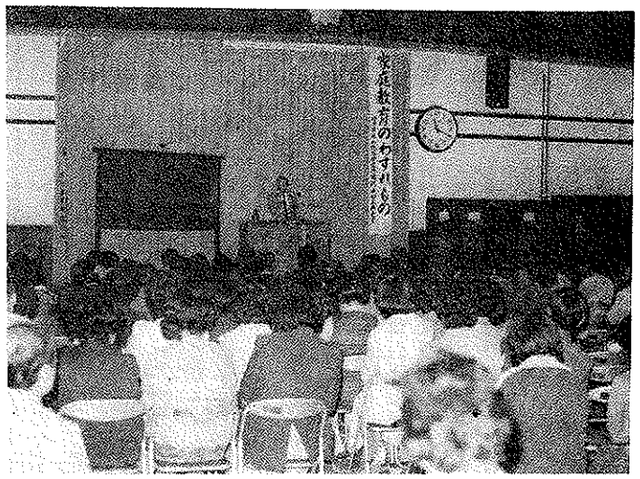
幼稚園から大学までと、学歴社会のこの世、乱塾時代と言われる学習塾、けい古通いの実態をはじめ、学校、塾、テレビ、マンガで明けくれている子供の生活ぶり、毎日が憂うつだろう。

子供が一番楽しいと感じるのは、テレビを見ている時間、マンガ、ドラマ、コントショーなど、ブラウン管より流れる内容や情報は子供の意識と行動に大きな影響を与える。

テレビと子供の関係を堀り下げて行くだけで、子供のおかれている様々な問題に行き当るだろう。

教育とは、子供に近づき、近づかず、親とは、木の上に立って見ると書くが、遠くより子供の、全体像を見てやることが、大きな一つの要因で、社会でのねばり、想像力の時代に負けぬよう、基本的なしつけを教え、自分達で考え出す子供達の自主性を養う、家庭は子供達を守る最後のとりでとなるべきであり要である。

学歴社会にしがみつくか、子供の自主性を尊重するかの時に、迷うことなく我が子を取るだけの腹を据えたうえで、最大限手をかけ、目を注ぐよう努めねばならぬ、忘れものなきように。



教育と父親

学級委員　大橋　一昭

両親学級が終わり、十時三十分からの講演会に参加しました。

母校の講堂は二十数年前と変わっておらず、寒々と、どこからともなく隙間風が身にしみました。

日曜日、しかも雨天で男性は外出することもないのか父親が多勢満席で教育に対する関心の深さを物語っていました。日頃仕事に追われ教育をどのようにしたらよいのかわからない折、一つでも身につけようと真剣に耳を傾けました。

講師は教育に一生を献げた四日市教育研究所の教育界のベテラン井田先生。「家庭教育の忘れもの」と題し、内容は現実的でウェットに溢れあっという間の一時間で、「父親」の理想像に重点を置いて講演なされました。

現下は高度経済に伴い、物が豊かで何でもできる自由な時代。テレビの普及が子供を映像人間にしてしまい、感覚的にしか物事を考えない子供がほとんどです。ご多分にもれず我が家もチャンネル権は全て子供、食事をしている時もテレビ、食べ終ってもテレビといった具合で、家族で話し合う時間がない。母親は「テレビばかり見て……」「この点数は何……」「宿題に……」と声ばかりで「ムチ」を振ろうとはしません。

先生は家庭教育の「要」は「父親はリーダー、母親はコーチとして両親がうまくチームワークをとり、父親は昔の「がんこ親父」を発揮せよといわれる。

確かに母親は「勉強させていてくれたら……」という考えが常にあるようで、当家庭も母親まかせで「父親ぶり」を振り回したことがない。

しかし、小学生時代は家にこもっていないで、大空の下身体づくりが大切であり、友達と遊んだりけんかしたりしている間に知らずに人間ができていくものと思っていますので、ほとんど干渉しません。今後もこの考え方で育てていくつもりですが、先生の言われた教育の育て方として、まず体、態度で示す、次に手をとって教えてやる、それでもダメならムチを加えて放っておく　この基本の型で実行したく思います。

子供一人一人は能力、環境、性格は異っています。どの子供も必らずいい所があります。私達親は、常に暖かい目で、しかし、決して甘やかすことなく、干渉しすぎることなく一人前に育つべくしつけ、教育をつけてやることが、大切であると講演を聞いてしみじみと感じさせられました。

両親学級によせて

別名三丁目　三戸　武志

あいにくの小雨模様の天候でしたが、子供から是非参観するようにとの言葉にひっぱられて校門をくぐりました。実際私は、子供の教育については一切妻まかせで、時折わからないことを子供や妻が聞いて来た時、ねじを一昔前に巻き戻しながら説明してやる程度です。

まず、五年生の長女が社会見学のグループ発表をするというのでそれを聞きに行きました。グループ毎に決められたテーマについて協同でまとめ、みんなでそれぞれ発表していました。そして二年生の長男のところに参観に行きました。そこでは乾電池を使ってどうしたら豆電球がつくかの理科の実験をやっていました。

それぞれの授業を参観してまず感じましたことは、生徒と先生が和気あいあいといいますか、などやかな雰囲気の中で授業が行われており、生徒はのびのびと意見発表や感じたことを卒直に発表しているということです。特に、二年生の子供達が、活発にしかもはっきりとした意見を述べているのを聞いてびっくり致しました。女の先生だからこのような雰囲気の授業が出来るのかとも思います。次にたまたま今回そうであったかもわかりませんが、生徒を班単位又はグループに分け、それぞれの中でお互いに助け合い協力して授業を進めて行くという形を取られていましたが、大変好ましく感じました。

日頃の子供の学校での生活は断片的にしか聞けませんが、しかられたりほめられたりの話に、一喜一憂しています。現在登校拒否症といった悲しい記事も新聞に紹介されています。又各種の塾に対する熱も相当のようです。これらのことを考えてみましても元気に学校に行きのびのびと成長してくれればと願っています。親としては子供を厳しさと同時に暖かく見守ってやりたいと思っています。どうか先生方におかれましても是是非非で厳しさ

と同時に大きな目で子供の成長を、はぐくんでいただけたらと思います。

別名　柿沢　秀茂

十数年前に学生生活を終えて、学校教育という言葉から長い間遠ざかっておりましたが、いつの間にか長女も健康な小学校一年生になり、それと同時に学校教育という言葉が、又身近かなものとなってきました。長女の持ち帰ってくるテスト用紙をみると、自分の送ってきた学生生活を長女も又同じように歩みながら、楽しみ又悩むであろうことが想像され「しっかりやれよ」と無言のうちに激励しております。

そのような時期の十一月中旬に授業参観が計画され、日曜日でもあったので会社勤めをしている私も参加出来、親しく長女の授業振りを見ることが出来たことを、大変感謝しております。小学校一年生の授業雰囲気や授業態度が、どのようなものであれば望ましいのか今まで考えたことも、気にとめたこともなく比較のしようはありませんが、先生を中心に生徒が自主的に授業時間を送っていく様子をみて「あゝ、小学校一年生とはいえ立派に集団生活の営み方を勉強し、個人々々が自分の立場を実践しているではないか。我々大人もぼんやりは出来ないぞ。」と満足と同時に、はっと、自己反省させられました。

授業参観が終わって、井田正典先生の講演が開催され、私も参加させて頂きました。講演の間、先生の話の内容と私の両親が私にとった教育の仕方を比較しながら聞かせて頂きました。私の子供の頃の家庭は、現在私が過している家庭とは物質的貧困さという点では比較のしようもない程でした。子供六人を終戦後の貧しい社会の中で苦労しながら育ててくれた両親に、子供心ながら「ありがたい」と思いながら毎日を過してきました。その気持ちが無学な両親を尊敬し「立派に育たなくては両親にすまない」という気持ちを生み、今日の私のささえの一つになっていると思います。井田先生の話を聞いている内に、特別「勉強しろ、勉強しろ」とやかましく言わなくても、両親への尊敬の念が子供を勉強をさせずにはおかないのだという考え方が正しいと確信することが出来ました。

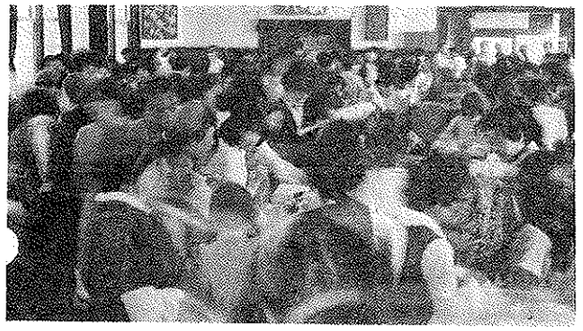
しかし「子供から尊敬される親になる」と一言に言うのはたやすいことですが、いざ自分の家庭で日々の中にどう行動してそれを勝ち取るかというと非常に難かしい問題で、こうすれば絶対ですというものはなく、各家庭各々の実情によって異なるのではないかと思います。

これを機会に私の家庭の中での私の有り方についてもう一度考えてみたいと思います。

バザーによせて

別名町　前川　豪代

昨年の春三月、主人の転勤に伴い四日市へ越して参りました。初めての地で右往左往している私にどういう訳か、母親部の委員を仰せつかり、昨年今年と二年も続いてお世話させていたゞくことになりました。料理教室やバザーと、前の学校では味わったことのない父兄と子供達と先生の温かい交流のあるのを知りました。中でも母親部のメーン行事であるバザーには、各家庭に御協力をいたゞき今年も盛会のうちに終えることができました。



早朝から講堂前で品物を受取り、各種類別の仕分け、値段付けと丸三日間の大作業でしたが、部員の方々は家事のやり繰りをして出て下さいました。しかも段取りよく和気合々のうちに作業は片づき、当日を迎えました。

我家の五年と二年の息子達は、この日の為に溜ておいたお小遣いをにぎって、昼食もソコソコにかけつけてきました。講堂前には三十分前ともなると長蛇の列です。一時半開場……と同時にそれぞれ目的の品に向って一目散。お目あての品を山のように抱えて満足気に帰られる父兄の方々の後ろ姿を見送りながら、至らぬまでもお世話させていたゞいた三日間の疲れが、どこかへ飛んでいったような安堵の気持で一杯でした。

今年の収益金七十余万円を羽津小学校のために生かして下さることを心から願うと共に、更に一年後、二年後……いや永遠にこのバザーという素晴らしい行事が続きますよう期待してやみません。

私は、子供を学校に通わせ始めて、十年近くになりますが、バザーの会場に入ったのは、たしか上の子が、二年生の時と、このたびで二度目です。

それと云うのも、上の子の頃には、授業参観のあとでバザーがあり、授業をおえて、会場に行った時には、人は、一ぱいだし、バザーなど初めての事もあって、何を買う間もなく、品物が少なくなり結局、ほしい物が手に入らず、手ぶらで帰って来たのでした。

もっともあの頃には、出品物も少ない事もあったのですが、それ以来自慢は出来ませんが、バザーの会場に入った事はありませんでした。二度目のこん度は、お手伝いでしたが、人が多いのは相変らずでしたが、あの頃にくらべ出品物もずい分多かった様です。

それでも本部役員さん方の話だと、去年にくらべ半分くらいの量だとか、でも会員のみなさんのご協力で、たくさん売れて、初めの予想よりも売上金は多かったとか、今年は、はじめから会場に入っていたのですが、お手伝いだったため、あれがほしい、これがほしいと思いながら、又ほしい物が買えませんでした。

私とバザー

別名三丁目　岡屋　孝子

私は、バザーでは、よくよく品物が手に入らないように出来ているのでしょう。

来年は子供も小学校最後の年でもあるので、是非記念になる様なものを一つでも買って「ああ、これは、あの時バザーで買ったものだわ」と思い出になるように出来たらいいなあと考えております。

趣味のつどい

生花教室に参加して

羽津第二　能登　智津子

きょうも、長男が学校から帰るなり大声で、「お母さん、これ何という花、造花とちがうの」「それはストレチアと言って、南アフリカ原産の花で、日本名で、ゴクラクチョウカというのよ」玄関を開けて、新しい花が活けてあると必らず「今日のお花はきれいだね」とか「いいにおいがすると思ったら、百合の花があるね」と関心を示してくれます。この様子を見ながら、二、三才の頃、剣山のすみのあいている所に、道端で摘んだタンポポを、一生懸命活けている姿を、思い浮かべました。

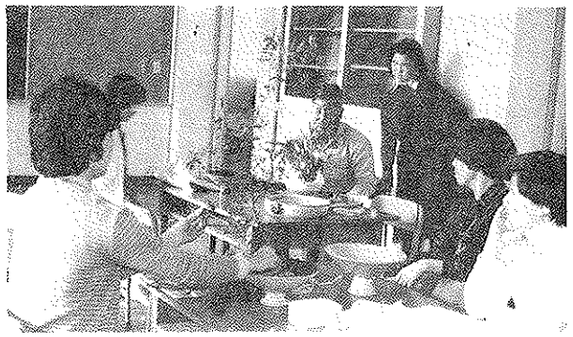
最近は、季節の鉢植えを買い求めたり、球根や花の苗を植えて、育てる楽しみと共に、一つ一つの花の美しさを楽しんできましたが、色々な素材を組み合わせて創り出す「調和のとれた美しさ」と「落ち着いた雰囲気」を漂わせてくれる盛花もまた、魅力のあるものです。

若い時に習得した、生花の技術もいつの間にか、自己流になってしまっていましたが、生花教室に参加させて頂いて、先生から指導を受けますと、同じお花でも、一本一本がいきいきして、全体にすっきりしてくるから不思議です。

季節感覚がうすれていく中で、また、毎日が忙がしい、ゆとりのない生活に追われているからこそ、花とのふれあいを大切にして、心を豊かにしていきたいと思います。

陶芸教室

城山町　佐藤　千歳



昨今、ハンドクラフト教室は、何処も人気の的です。

当校でもＰＴＡ活動の一環として、陶芸教室等趣味を通じて、有意義な活動がなされています。

私共も、陶器の造り方を学ぶ事が出来ました。これも主人の転勤で四日市に来られたチャンスだと思っております。

特に伝統陶芸の萬古焼等、身近に学ぶ事が出来、今迄と異なった陶器への関心が深まり、日頃使用

するお皿一枚にしても、素材、色具合と、種々な見方が出来る様になった気が致します。

陶器その物の値打等は判らなくとも、陶器を造る尊さ等を通じ、一層の親しみを感じる今日此頃です。

こちらへ来る迄は、萬古焼は、信楽の土と、常滑の色具合いと混合させている様な感じが、私には致しました。でも、それらは種類が豊富にある事を、私は少々の探索で知る事も出来ました。

陶芸教室作品展

これも実際に、土のぬくもりにふれる事が出来た実感です。

今後も、この伝統の陶芸教室を続行して戴きます事を念願し、四日市の思い出に、そして作品に日付を銘記して、何年か時が過ぎた時、そっと見つめる事でしょう。

そして、又、子供と共に汗を拭きながら作った、真夏の想い出の一ページともなる事だと存じます。

そして私達親子は、来年の作品に心を燃やしております。

表彰をうけて

PTA　書記　小川　良二

十月三十一日、四日市市PTA大会が市民ホールで開催され、その席上において、私、感謝状をいただきましたこと、「しでがの」の紙面をおかりしてお礼申し上げます。

教育、PTA活動に無関心だった私が一歩足を踏みいれましたのが……今日にまで至ってしまいました。

私は「奉仕」が好きです。自分で出来る事はどれだけ体を動かそうが苦痛に思いませんが、人間の輪、話し合いなど難しい事がたくさんあります。

人それぞれ顔、形が違うように考えも違います。時間をかけ、意見がまとまった時嬉しく思います。

家の中ではこの様な勉強が出来ません。PTA活動に力を入れる様になりましてからの私は、心身共一回り大きくなり、大変プラスにさせていただきました。

この度、市長さんより感謝状がいただけたのも、微力な私に協力して下さいましたPTA会員皆様の御蔭だと喜んでおります。

あと、三ケ月余りの任期に力を注ぐ覚悟でおります。

副会長　藤井　久子

日頃は、PTA活動に、大変な御理解と御協力を戴き、ありがとうございます。

去る十月三十一日、四日市市民ホールに於きまして、五十四年度四日市々PTA大会が開催されましたが、当日は、多くの会員の方々に御出席を戴き、ありがとうございました。

この大会で「PTA活動と青少年教育の振興に尽力した」との理由で、多くの方々が表彰されましたが、私もその一人として、表彰して戴きました。どうもありがとうございました。私の今迄のPTA活動は、短期間ですし、又特に皆様方に増した事は、何一つしていません。このような事から、今回表彰をお受けした事に対しまして、大変恥づかしく思います。又事の重大さを痛感させられました。

私は、今後残されました期間、PTA活動を通じて、少しでも、皆様方のお役に立つよう、全力を出して頑張ります。

どうかよろしく御指導下さいますようお願い致します。

駄知小学校を見学して

羽津町　森　悦郎

恵那地方に赴任した先輩から、その教育熱心さについて、じっくりと聞かせて戴いたことがある。

このたびの見学先、駄知小学校は、その面影を秘めた学校である。

それは、教育施設の整備のみならず、地域社会の住民自らが学習している姿勢をもっているからだろうか。

ここ駄知の町は、土岐の町と合併して土岐市を形成する土岐の片目といわれている、陶器の町でもある。

校門をくぐった第一印象は、町の人々の気持ちがよく反映しており、旧校舎の校門が保存されていたり、陶製のいすが置かれている。

また、児童一人一人による鉢植も、よい指導の成果かよく手入れがいきとどいている。

図書室の施設、蔵書はとてもすばらしく、又、その利用状況もきわめて活発である。

最高級の陶芸室施設を利用し、製作された児童の作品のできばえもすばらしい。この施設は、PTA活動等、社会教育にも活用されている。

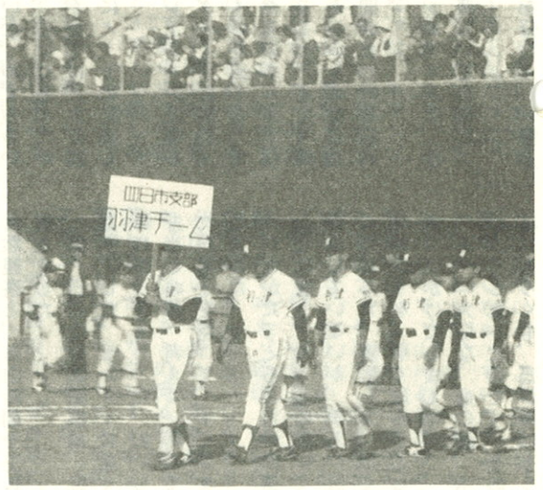
どの施設を取り上げても、なかなかまねのできるものでない。

児童の動きも利発であり、学校の教務及び校務分掌は、きわめて合理的である。

児童から受けた印象は、躾がきびしく、行動や態度がきわめて明確で、躍動する駄知の町の雰囲気を反映していた。

県大会に出場

スポーツ少年団野球部



県大会入場式・先頭にて入場する羽津チーム

野球少年団、三泗地区秋季大会において優勝、晴れの三泗地区代表として、昨年に続き県大会へ出場いたしました。

十一月三日、四日、津市市営球場にて熱戦の火ぶたがくり拡げられた。（県下各地より十一チーム参加）

第一試合は津市代表チームと対戦、ピッチャーの加藤君の三塁打をはじめ、一人で四打点をたゝき出すみごとな試合運びで、八対一とコールド勝ち、第二戦は亀山チームと一対〇緊迫したゲーム、二日めに駒を進めました。

第三試合は優勝候補の桑名市代表チームと対戦、一対二とおしくも涙を呑みましたが、さすが優勝候補チーム同志の戦いで見ごたえのある試合でした。又、六年生の選手諸君は、この想い出を最後にと球場の砂を袋の内へ詰め持ち帰るという、泣かせる一場面もありました。

皆々様のご声援ありがとうございました。

グリーン・スクール

六年一組　岡田　和久

十一月六日、七日、八日は、ぼくたち六年生が待ちに待ったグリンスクールだった。

六日の朝、学校を出発し、水沢までバスで行った。

野外活動センターを初めて見た時の印象は、ぼくが想像していたより大きくりっぱに見えた。

ぼくたち一組の男子は、大広間ときまった。はじめは、大広間よりベッドの部屋で生活したかったけれども、いざ生活をしてみると広くて、のびのびしているので、いい部屋のように思えてきた。

センターに着くとすぐ「もみじ谷」に行った。もみじ谷というぐらいだから、もみじが何本もありそこが谷のようになっているのだろうと思いながらいってみると、ほそうされた道のわきに何本も、もみじが立ちならび、その下が、がけになっていて、小さな広場があった。紅葉にはまだ少し早いがとてもきれいだった。

一日目、最後の行事はキャンプファイアーである。

キャンプファイアーは、センターの近くの広場で行なった。

まず、聖火によって点火され、キャンプファイアーを囲んで楽しい歌やおどりなどを全員でしたり、各学級で工夫された出しものを見せ合った。ぼくたち一組の計画していたきば戦は、残念ながら時間の都合でできなかった。

すみきった空気、山に囲まれ、木々におおわれた静かな中で、夜空に燃え上がる火を囲んでの楽しい一時は、忘れることの出来ない思い出となるでしょう。

二日目は、朝九時半に、センターを出発し近くの天望台からのながめはすばらしく、四日市の町はもちろん、名古屋、津、知多半島までも見えた。一つ一つの建物が小さな点ぐらいに見えた。

自然歩道を歩いた。めずらしい木が何本もあり、木には名ふだがつけられて、ぼくたちは、木の名前を覚えるためにノートに記録した。

夜は、リェクレーションで楽しんだ。各学級がグループに別れ、いろいろな出しものを出しあって楽しんだ。ぼくたちのグループはいすとりゲームをした。とても楽しいものや、おかしいものなどたくさんあって時間のたつのを忘れてしまっていた。

三日間のグリンスクールは、小学校生活一番の楽しい三日間だったと思う。

みんなで仕事を分たんし、協力し、責任を持って、食事の配ぜん、そうじなど修学旅行とはまた異なった事が経験できて、小学校生活の良い思い出になることだろう。

最後にグリンスクールでお世話していただいた方々や、先生方に感謝したいと思う。

グリーン・スクール

六年二組　藤井　公人

十一月六日、待ちに待った、六年間の楽しみでもある、グリーンスクールへ行く日になった。

楽しかったバスの中、なかなか眠れなかった夜と、書きたいことは山ほどあるが、この作文では、自然観察と、自由時間を主にして書きました。

第一日目の自然観察は、紅葉谷見学でした。センターに着くと、母に作ってもらった、おいしいお弁当とお茶、考えて、考えて買ったお菓子を持って、すぐさま出発しました。

がたがたでどろどろの山道を、一心に登り、やっとの思いで、紅葉はしていないが、美しい紅葉谷に到着した。解散して、ぼく達のなわばりを、早く取ろうとして、さっとかけだしました。

「あっ。」大切な、命の源、水筒をわってしまったのです。その水筒は、もろくも、底がぬけそうにわ

れていました。もう絶望だった。悲しかった。

お弁当も食べ、お菓子も全部たいらげて、センターへ帰ることになった。最後の力を振りしぼって、へとへとになって帰ってきたことは、忘れようにも、忘れきれません。

入所式が終わり、部屋分けをして、ぼくは二号室に入った。

そこには、不気味な物が飛んでいた。よく見ると、カメ虫だったのです。その虫は、さわると、くさいものを出すので、用心して退治した。

自由時間も、あっという間に過ぎ、おいしい夕食も全部たいらげキャンプファイアーの時間になりました。キャンプファイアーでは、省エネルックファッションショーというのが、新聞で作った服を着て見せただけですが、ユーモアがたっぷりあって、大変おもしろかった。

次におもしろかったのは、三組の、日本の歴史という、原始時代から平安時代までの、仏教や生活の様子を、おもしろくまとめたものでした。これでキャンプファイアーも終わり、入浴して、第一日目は、楽しく終わりました。

そして、十一月七日、第二日になりました。

この日は、自然観察、リクレーショ[illegible]と、楽しくておもしろい行事がありましたが、なによりも、一時間の自由時間が楽しかった。広場に行くまでに、ヘビに出くわしたり、広場では、三組の友達とドッチボールをしたり、その日はぼくにとって一番楽しい日になりました。

帰る日十一月八日、あと三日は青少年野外活動センターにいたい気持ちでいっぱいでした。

緑の学校の思い出

六年三組　山本貞美

十一月六日。緑の学校の日が来た。修学旅行に比べると、すぐにやって来たように思った。

センターは、いろいろな設備がととのっていた。そして、緑にかこまれていて、白い色のセンターが、いっそう美しく見えた。センターにつくと荷物を置いて、自然観察に、もみじ谷へ行った。もっと広くて、谷らしい所だと思ったけれど、わりとせまい所だったし、コンクリートの道の中にあるというのは自然でない感じだった。でも谷の中に入るとたきもあってすずしく、感じがよかった。もみじの木がたくさんあって美しかったけれどまだ紅葉していなかったので、残念だった。

センターにもどって入所式をすませた。わたしたちの部屋四号室は、二階のロビーの正面だった。部屋の中は、とてもきれいにしてあり、思ったより広かった。

一日目の夜になった。キャンプファイアーの時、せっかく考えていったゼェスチャーは、時間ぎれでやらしてもらえなかった。残念な事もいろいろあったが、初めてセンターへ来た日だったのに、もみじ谷へ行ったり、内部川の上流の方へ行ったりして緑の中で生活し、キャンプファイアーを楽しみよい日であった。

七日。自然観察に行く時、いくつ木や草の名前をノートに書けるかという学習をした。わたしは、校長先生や担任の先生にも聞いて、いっぱいノートに名前を書いた。六十ぐらいあった。でも本当におぼえているのは少ないかもしれない。まず、名前をおぼえて、木の様子などと結び付けていかなければいけない。

木の名前には、アセビとアケビのように似ている木や、サカキのようで、サカキではないのでヒサカキとかいう木もある。名前がちがっても、葉がとても似ている木もあった。ふじやさくら、ばら、きくなどに山や野を付けて、山ふじや山ざくら、野ばら、野ざくという木もあった。ふつうのふじなどの木とはあまり変わりがなかったようだけど、よく見ると、葉の形が少しちがっていた。ふつうのふじやさくら、ばら、きくなどの木に比べて、山にあるだけに山の気候に合うようなつくりをしていたと思う。そして、大きな花をつけないで、わりと小さい、かわいい花をつけていると思った。色も限られており、黄色っぽい色の花が多かったと思う。むらさきしきぶは、山での美しい実を結んでいた。むらさきの実は小さくて、美しかった。カクレミノのように葉が大きい木や、イヌツゲのように葉が小さい木があった。

この緑の学校で、ぜひ見たかっ

たのは、炭焼きがまだが、これは見かけることができなかった。

また、資料にあった水ガモがまだセンターで見付かっていないので、探して見たいと思っていたけれど、池の近くには近よってはいけなかったので、探す事が出来なかった。

二日目の夜になった。リェクレーションの時、みんなとてもおもしろい事をしていた。わたしたちは、ゼェスチャーをしたけれど、三つしか出来ず残念だった。一組の先生にもゼェスチャーをやってもらうつもりでいたのに、先生は他にご用があったので、実行できなかった。キャンプファイアーよりみんな静かなようで寒くもなく回りが楽しく明るい感じだった。

その日は、二日目の夜だけあって、センターの生活になれてきたようだった。

八日。朝は、昨日よりおそくまでねていた。緑の学校の最後の日なのだ。でも、もう少しここにいたい感じだ。まだ、ここでの集団生活にすっかりなれていないし、もっと緑の中で生活していたいと思ったからだ。その日は、外へ行く事はなく、作文を書いたり、部屋の整とんをしたり、帰る用意をしていた。

センターのおじさんたちは、きびしかったけれど、おじさんたちの言われる事は、とうぜん私たちが守らなければならない事なのだ。

校長先生が退所式におっしゃったように、家の中でお客になってはいけない。本当によく考えてみれば、いつもは、お父さんやお母さんにいろいろとやってもらっている。家庭で一人一人がきちんと物事が出来るようにするため、緑の学校では、自分で、または班で、みんながよく努力した。緑の学校で身につけた事を、家でもやっていかなければいけない。

また、「自然に親しみ」、「自然に学び」、「自然を守る」という事が、先生方やセンターの人のお話でよく分かった。この三つの事は緑の学校でも守れただろう。

自然や緑の中でのびのびと出来たし、思い出になる事もたくさんあった。修学旅行より良かった。それは、とまる日数も多いし、社寺などを見学するだけがおもだった修学旅行とちがい、自然から学んでいったからだ。学校の勉強よりは、楽しみながら、体で覚える事が出来たようだ。

学校で見る友達を緑の学校において一日共に生活して、ちがう面から見ることができて、友達に対する考えが変わる事もあり、おたがいに、仲良く協力も出来たようだ。

緑の学校によって自分について反省する事もあったし、自分にとってよい事となった。集団生活は一人一人が分担して仕事をし、みんなの生活をなり立てていかなければならないという事も分かった。集団生活が、いかに大切であって、簡単に出来る事ではないという事も分ったので、自分にとって、とても良い勉強となり、よい思い出となって、いつまでも忘れる事が出来ない思い出になるだろうと思う。

自然観察とキャンプファイヤー

六年四組　宮田　毅

ぼくの、待っていたグリーンスクールがやってきた。一番楽しかったことは、たくさんありすぎてこまるほどある。その中でも、特に楽しく心に残ったことは、自然観察とキャンプファイヤーのことだった。

野外センターへ着くと、すぐに自然観察に行く予定になっていた。着いてしばらく休んだ後、荷物を、ロビーに置いて、資料、ノート、筆記用具、べんとうを持って出発した。センターに着いたときから周りが緑ばかりなのでおどろいた。歩いても、歩いても周りは、木ばかりだ。いつもは、気にもかけなかった木だが、よく見るととがった形やまるい形をしたものやそれぞれちがった色をしたものが多いと思った。

いろいろな木を見たり友達と話をしているうちに、もみじ谷に着いた。そこで、昼食を食べてまた、センターに帰った。帰る途中に双眼鏡で四日市市内を見おろした。ちょっとくもっていてはっきり見えなかったけどとてもきれいだった。

二日目は、野外活動に出かけた。九時三十分ごろセンターを出発し、昨日と同じ道を歩いて少し行くとキャンプ場に着いた。そこで、班別に、分かれて行動した。いろいろな木について調べた。スギ、アオキ、イヌツゲなどたくさんの木の名前をおぼえた。葉をスケッチしたりして、その後、展望広場へ行って、ゴリラ山、大門池、伊勢湾の方など四枚をスケッチした。とても楽しかった。

最後に、キャンプファイヤーのことだ。

一日目の自然観察も夕食も終わりそして、キャンプファイヤーの準備も終わりついに、始まった。

「いつ始まるか。」と楽しみにしていたキャンプファイヤーだ。なにしろ、キャンプファイヤーは、ぼく自身にとって始めてのことなのだ。そのうえ、そのキャンプファイヤーの司会がぼくなのだ。

「今から、トーチが入場してきます。入場してきたら拍手でむかえてください。」と言ったぼくの言葉からキャンプファイヤーが始まった。

全員で歌ったりフォークダンスをしたり先生がたの言葉や児童代表の言葉も終わりやっときん張もほぐれてきた。次に、各組のだしものに移った。みんな、楽しいゲームや歌でとてもよかった。しかし、時間がだんだんと足りなくなって、安藤先生の時計を見ながら進行させた。そして、最後に、遠き山にを全員で歌いながら時間がのびたために終わりの言葉をしないで消火にかかり学習係を残してみんなセンターに帰った。

はじめてキャンプファイヤーをしてみて、みんなで火をかこみながら歌を歌ったりすることは、楽しいことだなぁと思った。

このことは、いつまでも忘れることが出来ないだろう。

グリンスクールの思い出

六年五組　岩田　直

ぼくは、十一月八日に緑の学校にきた。ここについて思ったことは、センターが、思ったより小さかったということだ。

ぼくが、ここで一番印象にのこったことは、ゴリラ山だ。力強そうで、ゴリラにそっくりだからだ。大きいゴリラが、山をいますぐこえてこっちにくるような気がした。そのときいろいろな山々をスケッチしたが、一番うまく書けたのが、ゴリラ山だった。

一日目のキャンプファイヤーは、一番初めのゆうれいの兵士という話しは、とてもこわかった。古市君たちも「岩田君こわくない」と聞いてくるほどだった。ぼくたちは、山中君たちと歌を歌った。山中君は、歌う前「いやだ歌いたくない」と言っていた。歌っているときみんなが、手びょうしをしてくれたのでぼくたちはとてもうれしかった。

夜は、つかれているのにぜんぜんねむれなかった。西川君は、ぐっすりねていたが、ぼくと古市君は、一時間もねれなかった。ぼくは、こんなこと初めてだ。ふだんは、いくらなんでも、五時間は、ねる。朝おきるとふらふらした。古市君もだ。それに比べると西川がうらやましかった。

二日目の夜は大広間でリクリェーション大会をした。ぼくたちは、クイズをした。クイズはちょっとしらけた。ほかの人たちは、とてもうまかった。最後に所長さんに草ぶえをふいていただいた。とてもいい音だった。一日の終わりと、里の秋という曲をふいていただいた。ぼくはそれを聞いてうっとりした気持ちになった。拍手はとてもうるさいくらいになりひびいた。それだけみんなも、ぼくと同じ気持ちで聞いていたのだろう。

その日の夜は、昨日ねむらなくてつかれたためか、スヤスヤねむることができた。ほかの子もねむっていたのだろう。とても静かだった。

翌朝ぼくは「夜が、一分くらいしかなかったのではないか」とさえ思った。ぼくはもっとセンターでとまっていきたいなぁと思った。

ここは緑ばかりで空気はよく、いいところだった。それにいろいろな木もあった。羽津にはアカ松などないだろう。ほんとうにいいところだった。

体力のある子供に

去る十一月十八日、両親学級の日に、井田先生の講演会を聴かせて戴きましたが、私なりに感銘する所が多々ありました。

その内容の一つとして、子供同志がケンカをするとなぐった子供が腕を折らかすという程に今の子供は骨が折れ易すくなっている。又、朝の集会で先生が十分間以上続けて話をすると、倒れる子供が多くでるという内容の話がありました。今の児童は平均的にみて、昔と比べて体力がないのです。

羽津に、サッカー少年団が結成され二年目になりますが、サッカーを志した六年生には、井田先生の話のような児童はいません。

高校受験の為の勉強も、大学受験の為の勉強も、最終的には体力が必要です。又社会人になってからも体の丈夫な人間が、最後には勝利をおさめるでしょう。このような意味から少くとも小学生時代だけでも、皆さんのお子様もスポーツをやらせて体力のある子供に育ててやって下さい。

羽津サッカー少年団では小学生時代の二年間以上サッカーを志す児童の為に、四年生の皆さんの入団をお待ちしています。

入団希望の方は、コーチである六年五組担任の安藤先生迄申し込んで下さい。

丈夫な児童が多くなる為に、皆さんのお子様の入団をお待ちしています。

四年と五年
最優秀作に輝く！

＝四日市市社会福祉大会にて＝

ご存知のように今年は国際児童年です。その意義をこめて、去る十月三十日、四日市市社会福祉大会が盛大に催されました。席上、市内小中学校児童生徒の「福祉に関する作文」の中から各学年一点の最優秀作品が応募児童本人の手によって朗読発表されました。

当羽津小学校から応募した作品のうち、四年と五年の部で、それぞれ最優秀作として受賞いたしましたので次に紹介させていただきます。ぜひ、ご一読くださいまして、社会福祉について、いっそうの正しい理解と認識を深めていただければ幸いに存じます。

体の不自由な子の運動会をみて

四年五組　水谷　亜希子

夏休みに、入る前先生から、体の不自由な人や、病気の人たちにはげましの作文や、手紙を書いてくるようにと言われました。

でも、わたしは、とってもこまりました。

だって、わたしはいままで　そんな人たちにあってもただ「かわいそう、気のどくだなぁ」と思うことぐらいで、あまりかんしんがなかったからです。

でも、一度体の不自由な子たちの　学校の運動会を見たことがあります。

その時、足の悪い男の子や、手の不自由な女の子たちが、いっしょうけんめいかけっこをしていました。

中にはすわりこんだり、ねころがったりして走るのをいやがる子がいました。

その時、先生や　近くにいたおばさんたちが、いっしょうけんめい走るように手をかしていました。

中には、先生たちよりも大きな男の子もいました。

それでも、先生たちは走るように、その子たちを　だきあげたり手を引いたりしてさいごまで走らせました。

どんなに、いやがっても一人としてと中で、やめさせたりしませんでした。

そして、さいごの一人が走り終わった時　見ている人たちが大きなはくしゅを送っていました。

ハンカチで目を　おさえている人も、いました。

そして、走り終えた子たちはとってもうれしそうな顔をしていました。

わたしたちの時は、どうでしょう。

走れるのがあたりまえだ、と思っているから、走り終わった時「一等に　なれなかった。ああ、えらかった。」ぐらいの、気持ちしかないでしょう。

お母さんたちだって「家の子はおそくてだめな子。」ぐらいしか思わないでしょう。

この文を、書いていてわたしは自分の体が　元気で手も足もどとも悪くないのだから、いままであれはできない　これはだめだとあきらめていたか、これからは運動会で見たあの子たちに　負けないように、がんばろうと思います。

なんだか、はげましの文を書くつもりが、反対に自分をはげます文になったようです。

これから先、いいお医者さん、いいお薬がたくさん出来てきてその子たちが、自由に走ったり、およいだり、出来るようになってほしいと思います。

きっとその日がきますように……

ぼくの弟

五年二組　河隅　弘樹

ぼくの弟あつきは、耳が悪くて中部西小学校のなんちょう学級に通っています。朝七時五十分になると元気よく出て行きます。羽津小学校のぼく達の方が、五分ほど早く出ます。

あつきが二才で、ぼくが四才で一番下の弟は一才の時でした。津のろう学校での幼稚部の教育が始まったのです。そして、一番下の弟が、西浦幼稚園に、ぼくは、橋北幼稚園に入りました。

母と弟の戦いの一れいをあげてみます。あ、い、う、え、お、の声の出し方からです。音、言葉のリズムを覚えさせることです。毎日、同じ事ばかりくり返していました。いやになってなき出したり、ぐずったり、便所ばかり行くのです。ぼくは、レコードの音がやかましいし、弟の気がちるので訓練中は、外へ出ていました。友達のところへ行けるので、うれしかったように覚えています。母はおかっ手をしながらも、大きな声大きな動作で、一つでもたくさんのことばを教えようと真けんでした。その母に引っぱられて、ぐんぐん成長しました。ぼくも、二年

生のころは、弟は訓練しなければならないけれど、ぼくらはいいんだ、という気持ちで、かわいそうだなと思いもせずに見ていました。

母は、弟をつかまえて勉強させようと、ヒステリーになるので弟はなきます。ぼくらも、テレビは見せてもらえないし、すべて家は弟中心でした。おかあさんは、ぼくのいうことは、フンフン頭だけふって、うわの空できいていました。そのたびに、ぼくばかり、ぼくばかりと、よく母に言ってしまいました。ぼくも、ほんとうに、いやなめをしたことばかりでした。いっしょに遊んでいても、わがままをするので、みんながいじめるのです。しまいには、ぼくまで、やめさされたりするようになります。ぼくのためにお金はとっていくし、プラモデルはこわすし、友達ができないから、かわったことをしてめ立ちたいのです。こまることばかりします。母は、帰ってきて、そんな話をきくと、すわりこんでしまいます。それでも母は、「ぼくがわるい、おかあさんがわるいのよ」と言って、弟をあまりしかりません。おこる気りょくをなくするのです。

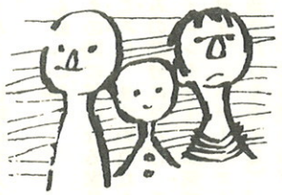
でも、弟が、中部西小学校に入学したころからは、ぼくは、弟にみかたするようになりました。母も、ぼくが四年生のころから、何かぇがかわったのか、何でもぼくに、そうだんしたり、ぼくの話を　よく聞いてくれるようになりました。ぼくをたよっているみたいです。

それでも、弟の勉強になると変心します。そんな時、ぼくは、「おかあさんがそんなにおこるなら、ぼくが教えてやる。」と言って、時々交たいする時があります。

母は、最近よくぼくをおだてます。母は、ほうしんを変えたみたいです。しかられるよりいいですけど、気持ちわるいときがあります。

あつきも、このごろでは、ほとんど、いじめられないようになりました。

もし、母がいなくなった場合は、ぼくと、一番下の弟で、弟をまもってやろうと決心しました。みなさん、どこかであつきに出会ったら、話しかけてやってください。



常任委員会だより

第五回常任委員会　九月十日
- 社会見学（土岐市駄知小）
- 市P連大会出席について
- 九月学校行事について
- 学校教材備品購入について

第六回常任委員会　十月八日
- バザー開催について
- 両親学級と講演会について
- 球技大会について
- 料理教室について
- 保険団体積立金使途について
- 学校行事について

第七回常任委員会　十一月五日
- バザー会計報告について
- 親善球技大会について
- 両親学級について
- 十一月料理教室について
- 学校行事について
- スポーツ少年団報告

第八回常任委員会　十二月六日
- バザー収益金の使途について
- 各部の活動計画について

＝バザー収益金の使途＝

バザー総収益	￥716,838
前年度繰越金	￥170,697
計	￥887,535－

- 折りたたみ椅子
  (1,650+50)×150＝　255,000－
  いす　寄贈シール
- 児童作品展示ケース　138,000－
- 児童図書 800円×250冊＝200,000－
- 防球ネット　258,000－

残　金　36,535－

暮らしの歳時記

毎年ながら、暮れの大掃除はたいへんですね。日頃手の届かないところも丹念にしたいもの。そこで気になる所のそうじのポイントを……。

シールのはがし方

壁や窓、机などに貼られたシールやワッペンは、ドライヤーを全体にムラなくかけて温めると簡単にはがせます。紙の上に貼られたものや古くなったシールもこうするととれます。接着剤のアトが残った時は、マニキュアの除光液でふくとおちます。

天井のほこり落とし

柄の長い座敷箒の先に古タオルをかけ、この上からストッキングの古いものをすっぽりかぶせます。これで天井をふくと、ナイロンがほこりを吸いこみ、中のタオルにうまくほこりが吸着して楽に掃除ができます。

じゅうたんの手入れ

・じゅうたんにからみついた髪の毛やペットの毛、ほこりは、炊事用のゴム手袋をはめて、なでるようにゴミをよせると、思いがけないほどとれます。いつまでもフワフワした感触を保つには、掃除機は毛足をいためるので週一回程度にとどめ、月一回、住居用洗剤をうすめた水でぞうきんをかたくしぼってふくなど、日頃の手入れが大切です。

じゅうたんのへこみ

模様替えの時に気になる家具のアトのへこみは、まずぬれたタオルをへこみの部分にひろげ、その上からアイロンをあて、蒸気でふつくらさせます（スチームアイロンの時は蒸気だけをあてる）。毛が柔らかくなったら硬めのブラシで毛足を逆なでるようにすると、ずいぶんへこみが目立たなくなります。

お正月ミニアドバイス

年賀状をいただいて、出し忘れたことに気がついたら？

ふつうの場合には、わざわざ〝出し忘れていて申し訳ありません〟などとふれる必要はないでしょう。さらりと、さりげなく、ただし、折り返しすぐに、ふつうの形の年賀状をふつうに出すだけでよいのです。ただ、どうしても気になるようなら、たとえば、〝新年のお書き初めのつもりで、いま書いております〟などと書き添えるのも、いでしょう。受けとる側は年末に書かれたものとはひと味違った新鮮味をもって受けとってくれるはずです。

さらに、いっそ年賀状という形にはこだわらず、こちらからは〝寒中見舞い〟という形で出すという手もあります。

スーツのエリなどについたマヨネーズは？

マヨネーズのようなベタベタしたものは、こすると汚れが広がってあとから困ります。こういうときは、手近な白い吸湿性のあるものを盛り上げて汚れを紙でつまみとります。白いものとは、塩、タルカムパウダー、重曹、粉末洗剤などで、塩が最もよいでしょう。山のように盛り上げては紙でつまみとり、また盛り上げてはつまむというようにして、全部とれたら、そのあと洗剤液でしぼったタオルでふき上げます。この時の洗剤液は水一リットルに台所用洗剤キャップ一杯をとかしたものでよいでしょう。淡い色でしみが残りそうなときは、つめブラシで少々たたいてふき上げます。あとから清ぶきをします。多少心配な時は、清ぶきのタオルに酢をチョンチョンとたらしたものでもう一度ふいておけばよいでしょう。

上等のスーツの時は、クリーニング屋さんへ。

ですくさいど

◎師僧がお経をあげるため、走りまわったところから由来するという〝師走〟

子供たちに出来るだけお手伝いをさせ、少しでも心のふれあいの場を……。

◎核家族が増加し、昔ながらの年末、年始のしきたりもうすれがち。この機会にもう一度古きよき時代の慣習をおもいおこしてみてはいかがでしょうか。

◎今年は例年になく温暖。でも、木枯しの季節も間近か。体に気をつけ、幸せで明るい八十年代の幕あけがおとづれますよう、部員一同お祈りしています。

◎会員の皆様の御協力のおかげをもちまして、かずかずのPTA活動がつゝがなく、成功のうちに終了しつゝありますことを、非常にうれしく思っています。

◎PTA活動への御希望、学校への御要望、その他お気づきの点がございましたらぜひ〝しでがの〟におよせ下さい。